

カテキズムへの回帰 (2)

内村 剛 介

「カトリック的キリスト教からはもっぱら社会主義が生育した。ところでわがキリスト教が育てたものはプラトストヴォ(同感感)である」。

ドストエフスキーが遺した非公刊の雑文集の中のことばである。一八六二年―六四年の『雑記帳』にはさらにこうも書いてある。「社会主義は人類に対する敬意のないところに(群衆に)基礎を置いている」。

ドストエフスキーによれば、ヨーロッパの社会主義者たちは為すべきことを持たない。ヨーロッパの人間にはプラトストヴォの原理ではなくて個人の個別の原理が置かれている。だから彼らは、「来るべきプラトストヴォの定義から事を始めてそれを秤にかけ、定規で測り、その利を以て誘惑し、誰がそのようなプラトストヴォにおいてどれだけ得するか」を説き教え、また談してきかせるのである。「地上の利福勘定」にかなするこのような定義は「人間個々人の自由や全般の福祉にとってほんのちよっぴりした一滴を含んでいる」のだが、まさにこの一滴こそ人間が譲ろうとしないところのものな

のだ。「人間はそれを譲渡すればもう監獄だと知る。自分自身のままでいたほうがまだしもだと思ふ。何しろその方に完全な自由意思があるのだから」(ドストエフスキー遺文)。

ロシアにおけるカトリシズムへの呪いがどのように根深いものであるか、そのはしくれを私たちはドストエフスキーに即して見てみた。反西欧・反近代をここに見るといっただけでは足りない。ロシアにとってブルジョワ根性が耐え難く、それを憎むというのはむしろ階級以前なのであって、それはマルクシスト以降に始まるといったものではない。きちつと整った秩序、いや小じんまりと型にはまり整序されている秩序——それをロシアの精神は古くから軽蔑している。そのうち西欧のブルジョワ階級がこの小じんまりとした秩序を鼻の先にぶらさげて現実に顔を出すのを見ては、これに対するロシアの軽侮はいきおい憎悪へと移っていかざるをえない。西欧のこの秩序愛好精神を育てた者こそカトリシズムではなかったのか——ロシアはそのように疑っているのだ。

カトリシズムに対する憎悪はソビエト政権に引き継がれる。この

政権は発生的にいわば西欧の精神に多分に拠っている。西欧近代主義が弁証法的に虚妄へと傾斜する徴候を俊敏に捉えてその逆倒を企図するのがマルクスの革命であったとすれば、ポリシェヴィズムはこの「西欧精神の逆倒」線上に立とうとするものであるといわなければならないまい。少くとも教説上はそうである。だとすれば、ソビエト政権のカトリシズムに対する態度は兩棲的でなければならぬことになる。反宗教闘争において打倒さるべき対象としてのカトリシズムが一方にある。だが他方、西欧精神の正系上に位するカトリシズムはポリシェヴィズムの先達でもあろう。前者をポリシェヴィズムの顕教とし、後者をその密教と措いてもよい。

「イエズイト」一六世紀に生じたカトリック修道僧教団のメンバーをいう。イエズイトは社会各層に亘ってその影響力を強化することが出来た。次のプリンシプル創造の榮譽はイエズイトたちに属している。曰く「目的は手段を正当化する」。

このことからして、途上によこたわるもの一切を越えて行くところの偽善者とか原理原則を欠く者たちとかをイエズイトと称ぶことになる」(E・G・ターゲル『罪と罰』用語小辞典一九三〇、モスクワ・レニングラード、国立文学出版所版『罪と罰』所収)。

「イエズイト」は日本読みではジェスイットとなる。ところで一九三〇年といえはスターリニズムの確立過程の歳月に当り、ドストエフスキーの諸作品はなお大衆に啓蒙書として与えられていた。『罪と罰』には用語辞典まで添えられるのであった。十月革命の余韻がこの小辞典であるといっている。(余韻は、例えば、この小辞典の編者ターゲルの語法に表われている。「次のプリンシプル創造の榮譽は」といったイロニイはまだ精神の羽ばたきの跡を示してい

る。だがそののちスターリニズムは、その確立に伴って精神のあそびを消去していく。この小辞典の編者ターゲルも消去されたのだらう。少くとも現行のソビエトの文献によつては彼の名を検出することができぬ)。

カトリックに関し、そのもつとも戦闘的な集団ジェスイットについてスターリン後のソビエト政権はどう対処しているか。ここに一九五九年の『ソビエト小百科』の「イエズイト」の項がある。

イエズイト(ラテン語 Societas Iesu 略して S. J. つまり「イエズス会」である)はカトリックの修道僧教団。一五三四年イグナチ・ロイオラが創設し、一五四〇年法王パウロ三世に認可された。イエズイトの規約によればこの教団の課題は、カトリック信教を不可侵のものとして守り、その布教につとめるために闘い、また法王の無制限権力を強化するために闘うことである。その実践からイエズイトのモラルが形成された。すべての手段(中傷、殺害に至るまでのものを含む)は目的の達成のためにはよしとされる——これがそのモラルである。厳格きわまる規律、(教団内部における)上下の問答無用の服従関係——それらの基礎はイエズイトの学舎・教課ですでにきざされる。この教団は宗教改革や啓蒙主義に対する闘争において法王の主要な武器となった。一六世紀から一八世紀にかけてイエズイトはヨーロッパ諸国家の政治生活に介入し、苛烈な反撃を受けた。教団はかくて一七七三年に閉じられることになるのだが(ロシアからイエズイトが追放されるのは一八二〇年である)、一八一四年には西欧で再建される。教団はインド、中国、日本、エチオピア、ラテン・アメリカへと浸透していく。イエズス会は現存するカトリ

ック教団中最大のもので、会員三万二千、支部五八である（一九五三年現在）。この教団はバチカンの主要な武器のひとつを成し、ローマに住み終身無交替であるジェネラルに管理されている。イエズイットはこんにち民衆の意識にどのように定着しているか。現代ロシア語の汎用辞典はこういふ。

「イエズイット」 1、カトリックの修道僧、いわゆるハイエズス会Vのメンバー。この会は法王の支柱であり、かつまた最大限に凶悪な反動の支柱であって、進歩とデモクラシーとを相手に闘うに当って目的達成のためにはどのような手段も毛ぎらいしたりしない。 2、(転義) 悪らつで、面従腹背の人」(オジェゴフ「ロシア語辞典」、一九五三年版)。

カトリックに対するロシアの憎悪は明らかである。何がそのようにロシアをいらだたせるのか。それについて見るにつけても、私たちはカトリックの教義問答に触れていかねばならぬだろう。だが、そのような原点に遡るまえに「目的は手段をえらばぬ」というイエズイットの原則へひたすらのめり込んでいった近い過去のロシアを見ておきたい。ネチャーエフの綱領にその端的な表現を見る。

「第一条 革命家は運命的な人間である。革命家には自己の利害も、自己の仕事も、感情も、財産も、名前さえない。革命家にあるすべては唯一の、特別の利害、唯一の思想、唯一の情熱——すなわち革命によって占められている。

第二条 革命家は、その本質の深みにおいて、たんに言葉の上だけでなく、事実上、市民の秩序や一切の教養世界やあらゆる法律や、この世の儀礼や慣行の諸条件や道徳といっさい関係を断つたものである。革命家は自分にとっても容赦のない敵である。も

しも彼が彼の中に生きつづけているとしたら、それはむしろ彼を破壊するためにのみである。

第三条 革命家はいつさいの空論を軽蔑し、平和の科学を拒否し、それを未来の世にまかせる。革命家はただひとつの科学——破壊の科学だけを知っている……

第四条 革命家は世論を軽蔑する……

第六条……すべてのやさしい、気分を柔弱に表現する骨肉の情、友情、恋、感謝は唯一の冷静な革命の事業の情熱によって圧しつぶされなければならない。……昼も夜も、彼には唯一の思想、唯一の目的——容赦のない破壊がなければならない。冷静に、うまずに、この目的に向って努力しながら、革命家はみずからも死ぬ覚悟をもつとともに、目的達成をさまたげるすべてをみずからの手で滅ぼす覚悟をもたねばならない。

第七条 真の革命家の本領はいつさいのロマンチズム、あらゆる情感、歡喜、熱中を排す……革命家の情熱は、彼の中にあつて日常的なもの、常時的なものとなり、冷静な計算と結びつかねばならない」(マルクス・エンゲルス選集「ソ連版第一八巻、佐藤清郎訳「革命か神か」所収、傍点・内村)。

目的自体がアブソリヤートとなり、そうなることによって目的がいつさいの手段を呑み込む。いや、それだけではない。この目的を掲げた主体をも呑み込んで行く。これがネチャーエフらの行き着いた所であった。それにしてもここに私たちの見るのは「無私の精神」などといったものではなからう。ここにあるのは無私ではない。没我ではない。そうではなくて無主体なのだ。無主体がみずから無私を語ることはできぬ。無主体は本来の「私」を持たぬから

だ。無主体はただか無私をなぞるだけである。それはいわば末端が首頭をなぞることに似ている。ひとつの円環があつて、そこでは末端が首頭と見えかねぬものがある。そのとき、もつとも暗愚で無責任なものがみずからを前衛に擬することができ。奴隷根性が前衛を自称するのである。私たちはそれをネチャーエフに見る。しかも事はネチャーエフにとどまらぬ。奴隷根性は今もロシアを捉えている。「ロシア」というとき、私たちはむしろ歴史としてのロシアを視野に措く。「歴史としてのロシア」がソビエト・ロシアをその内に包み込み、レーニンらを取りおさえていることについてはいうまでもない。

ロシアはカトリックの何を憎んだのか。憎むからには惹かれるものがカトリックにはあつたはずだ。何に惹かれたのか。惹く力の強さに見合つて憎しみが現れたはずだ。惹く力の魅惑が及ぶに及ぶえぬものであると知ったとき、魅惑は逆に憎悪を招いたと考えていだろう。カトリックは、奴隷根性と切れたキリストにおいて成立したモメントをフォルムとして完成させたが、ロシアはついにフォルムの造型に至るべくもなかったのではないか。ロシアにとってフォルムは十九世紀に及んでもなお求められつづけられねばならなかったから、フォルムの欠如がもたらすロシアの不定形の中へキリスト以前のロシア土着の古俗が流れ入り、それがキリスト像において習合を見せることになる。私たちはたとえドストエフスキーの作品にほとんど無数の「ロシア土着の異教徒」たちの登場を見ることができ。ロシアにおけるフォルムの欠如についてはたとえば次のことばが問はず語りにそれを示している。

「私たちはついに確信を持つにいたつた。私たち、また特定のナ

ショナリティを成し、それは最高に自存のナショナリティなのであるということ。さて、私たちの課題はおのれのためにフォルムを創出することに存する。それは私たち自身の、自前の、わがグルントから取つてきた生みのフォルムの創出である」(ドストエフスキー「主権時代」誌発刊の辞、一八六一年、傍点・内村)。

一八六一年といえは農奴解放令布告の年である。この農奴の影はフォルムの形成をいじめるしく妨げているが、それはそれとして、私たちはつい一世紀以前のロシアがなお「歴史としてのロシア」の「フォルム」を求めつづけていることをここに確認しておけばよい。

(ついでにいえば十月革命後の文学潮流フォルマリズムはロシアにとつてひとつのフォルムの発見なのであつたが、ロシアの両棲性の緊張に耐ええずに亡んでいる)。

ロシアにおけるカテキズムの誕生及びその長命は無定形のロシアにとつて「規範」の摸索であつたと見るべきではないのか。だとすれば、ロシアの民俗における素朴な解放性(プロストタ/シムプリシテイ)と粗暴な強圧は不可分である。ラチンストヴォ(ラテンぶり)はカトリックに連なるものであるが、その斉合性のゆえにいにロシアの容れるところとならず、ロシアは粗暴に手荒く自家製の規範を生み、その規範はプロストタに迎えられるということになる。それについてヴェイドレの説くところはすぐれて(というよりも、あまりに)ロシア・インテリゲンチヤ的である。

「ロシアはヨーロッパからいかなるときといえども脱落することがなかった。その精神生活はキリスト教の基盤の上に生成した。このキリスト教はギリシャの継承者にしてローマ帝国の継承者であるビザンチンによつてもたらされている。この継承者はタター

ル侵寇のちも絶えることがなかったが、とりわけタタール以前の二世紀間、わが古代ルーシはビザンチンよりもはるかに強く西欧と結ばれていたのである。ノヴゴロドとプスコフは独立の喪失に至るまでの結びつきを保っていたし、イワン三世以降はそれがモスクワにおいてもみられるようになる。キエフ・ルーシにおいてきわだち、モスクワ・ルーシにおいても消えることのなかったキリスト教的ヨーロッパ世界の一体性は、モスクワ・ルーシが《ラテンぶり（ラチンストヴオ）》をひどく疑っていたとはいえ、特徴的なものであつて……」（『故郷への回帰』）

「革命前ロシアはヨーロッパの一部であつたし、ヨーロッパの国たろうとした。じじつまたそうなのであつた。初期にあつてはロシアをヨーロッパから隔てるものは何もなかった。コンスタンチノールを十字軍が破壊しそれについてタタールの侵寇があつて、それが《ラチンストヴオ》をおそれさせることになり、他のヨーロッパから疎外される。そしてそれはモスクワ王国にあの重苦しい刻印を押す。しかしながら四世紀余にわたるこの疎外も通常ひとの思うほどに完璧ではなかった。重要なのは克服を以つて疎外が終るやいなや明らかになつてきた事がある——つまりロシアは疎外がまたげられていたものを克服してその真の道をしたのであつた。疎外の終焉をもたらしたところの変革——変革というよりはむしろ革命——は狂暴であり、破壊的なほど粗暴であつた。とはいへ正当な方向に向つていた。ピョートルがロシアに果し状をたたきつけ、ロシアはこれにプーシキンを以つてこたえた、といったゲルツェンは正しかった」（『ロシアが再びロシアになる』）

《ラチンストヴオ（ラテンぶり）》に対するロシアの憎悪はヴェイドレのいうほど軽症ではない。それはまさに「憎悪」なのであつて「おそれ」の域を越えている。ラテンぶりとは教会用語がラテン語である習俗をいう。教会用語としてのラテン語がカトリックのフォルムを規制する主要なモメントであつたとすれば、私たちはここでロシアがブルガリヤを経由してスラブ語の教会用語を持ったというモメントを軽視すべきではなからう。このモメントがロシアのラングに大棒をはめ、ロシアの内的言語となり、やがてパールの断面においてプーシキンを生むのであるとなれば、ラチンストヴオに対する疎外はほとんど決定的とならう。ロシアのプロストタは、これに深くかわるはずである。

原始キリスト教徒たちの主たる「罪」はローマ国家の倫理に挑んだことにある。ローマ国家は国民の倫理を宗教において決定する不可侵権を持つと自負しそれを疑うことがなかったのだが、キリストらはそれをあえて疑うという「大罪」をおかしたのだ。ロシアにおいては国家は何であつたのか。ロシアのキリスト教はロシア国家に対する大罪をおかすといつたことがなかったのではないのか。ロシアの民の素朴なプロストタはそこで温存されたものではなかったのか。そしてそこではロシアのカチキズムは国家と宗教がその民に与える擬制の教義問答であるはかなかつたのではないのか。

（一九七・九・一五）

一 盤 散 砂

玉川 信明

本年六月一日から三週間中国を訪問し、その印象を記せということであるが、もともと考えがまとまりにくい上に時間的な制約があつて、その一端（といっても根本問題に関わる一端）のみについて触れると、孫文はかつて中国民族は砂の如しと揚げたものであつた。とにかくまとまりにくいのである。国が広いこともあつて、権力はおよそ部落単位に確立されており、各地群雄割拠して、いずこにおいても覇権が行なわれていた。諺にも「一盤散砂」（大きな皿にばらまかれた砂のような存在）といつて、その民族の一點的に統一され難い性格を現わしていた。

そのためにこそ代々中国革命家は身命を賭して民族統一のために躍気になつて来た

わけであるが、私が中国に行つて更めて感じたことは、この中国民族の特質についてであつた。恐らく民衆の真実を最も容易に知ることの出来る機会は街頭であろうと思われるが、街頭の中国人程、日本人に比して差異が感じられるものはない。そこには日本の急流のような人車の動きに対して、大河のようなおもむきがある。人は悠々と歩いて、走る大人というものが見当らない。朝のラッシュ・アワといえども、大抵は自転車通勤のようであるが、ゆつくりとペダルを踏んでゆく。道路脇の公園では停年退職の老人達が健康法のために、宙を舞うようにして大極拳の練習をしている。

昼めし時ともなれば、家の入口のところで腰を下ろして、どんぶり鉢に長箸をつつ

込んで喰べているのがあるかと思うと、その側には、陽陰にも入らず大八車の上に長と横たわつて寝そべっているのがある。万事が悠々としていてあわてるといふことがないのだ。われわれは広州から入つて、長砂、武漢、北京、南京、上海と歩いて来たが、いずこの都市においても同じであつた。その意味では中国は文字通り農業国であり、中国は大都市といえども、農業的風景、農民の心性からいくらかも切り離されていらないのである。街の大通りを野菜を積んだ二頭立ての馬車が往き、どうかすると牛や豚が自動車の行く手をさえぎることすらあるのだ。

ただしここまでは中国人の特性の単なる悠々ぶりを示すものに他ならないが、私が香港から広州鉄道に乗つて初めて中国都市広州へ入つた時の印象は忘れ難い。そこでは後にみた中国人の悠々ぶりに以上に、衝撃に近いような、グワツと横あるいは下方に広がつて俺は俺で生きてゆくといった、民衆の在りようを実感せざるを得なかつた。六月の広州というとすでに連日三十数度の夏である上に、丁度雨季にきしかかつている。汽車が広州駅へ着いたのは午後三時過

ぎでもあったろうか、ただでさえ労働もな
えてくる昼下りの上にむし暑い夏であるか
らして、町全体が何か淀んでいる。そこを
駅頭からバスに乗ってわれわれの宿舎であ
る「東方賓館」へ向かったのであるが、途
中窓外の光景を息を呑む思いでみつめてい
った。日本でいえばさしづめスラム街をす
っと走ってゆくのである。前口から中も見
渡せるような家の前には、むし暑いので腰
を下ろして涼をとっているのがいる。街路
には中国にはこうも人が余っているのかと
思える程の人間がズボンをまくり上げ、中
にはハダシでベタベタ歩いているのがい
る。男も女も同じ服装、年若い女がズボン
に大きなつぎを当てたのをはいて、堂々と
小雨降る中を傘もささずに歩いてゆく。

私は宿舎へ着く前に、スローガンでみた
「団結緊張」とか「勤儉節約」とかといった
文句の深刻な現実性を理解しないわけには
ゆかなかった。つまり日本にあって「団結
緊張」などという、マルクス主義のおも
むくところ当然ということになるのだが、
それが必ずしもそうではなくて、ここでは
無秩序ともみえる現実の必要上どうしても
掲げざるを得ない理由が呑み込めたのであ

る。中国人は昔も今も「一盤散砂」的性格
の持ち主であるが故に、「団結緊張」を訴
えねばならないし、中国指導部は時には大
きすぎる程の声も張りあげねばならないの
である。同時にあの人間の多さをみては、
単に発展途上の貧しい国であるからという
以上に、「勤儉節約」の必要も実感せざる
を得なかった。

かくして私はその後のいくつかの中国指
導部のだすスローガンにおいて、その適確
さと現実性を認めないわけにはゆかなかっ
たし、私は努めて中国理解派たろうとして
いた。

だが私は今は思うのである。中国民衆が
あであればこそ、中国指導部はますます
「団結緊張」と「権力集中」を訴えねばな
るまい。始終「団結緊張」を訴えねば、中
国民衆は又元の砂に戻ってしまう。従って
一層「団結緊張」を繰り返す。しかしそん
な努力は果して正しいのであるかと。ある
いはそれは無駄な努力というものではない
だろうか。本性的に中国民衆が砂であるな
らば、砂である本性のままにどうして全体
的な集合性が考えられないものかと思う。
九全大会で林彪は、「多中心論つまり無中

論」というが、「多中心論つまり無中心論」
ではないけなうのか。

ただし、文革後において中国では急速
に権力の下放が行なわれている。そのモデ
ルケースが人民公社であり、人民公社にお
ける自給自足的方向は必然的に中央権力の
介入を漸減させてゆく。そしてそのことを
非常に高く評価する人がいるが、その場合
考えねばならないことが二つあって、一つ
は小権力は権力よりもっとタチの悪い場
合があることであり、もう一つは「精兵簡
政」ということばにみられるように、簡政
Ⅱ（終局的には）無政は「精兵」において
保たれていることである。この二つの問題
を考えないでは中国を解いたことにならな
い。

×

×

×